
箱庭に、はぐれ者

ヤマシタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

箱庭に、はぐれ者

【Nコード】

N7482T

【作者名】

ヤマシタ

【あらすじ】

其れは凡人でも特別でも異常でもない——はみ出し者が箱庭学園で好き勝手に青春を送っちゃうような、そんなお話。「正直に言う」とツスね、 あらすじとか考えるとかが 本っ当に苦手で どうしても雑になっちゃうんす でも 俺は悪くない」※※注意※※めだかボックスのオリ主物です。話もネーミングもスキルなどの解釈もノリでなんとかしてしまいます。以上の事に「ムムッ何だコイツは」と思われた方はブラウザバック推奨です。※※注意その2※※文字サイズ小、横書きで読む、PC閲覧推奨。※※さらに注意※

※ただいま作者が受験前なので、更新は著しく停滞します。

ハジマリ

ああ、今日は間違いなく厄日だ。

それが俺の眼前に広がる光景に対して思わず抱いた感想だった。

その日の出来事を思い返せば、心当たりが全く無かったという訳ではない。

——例えば。

朝、6時にセットしたはずの目覚まし時計が4時に耳元で鳴った。

朝食のトーストを焼いている途中で突然ブレーカーが落ちた。

内部構造がそれでダメになったらしく、再び焼いたパン2枚が炭になった。

飲もうと思ったインスタントコーヒーが切れていた。

寝ぼけていた同居人に摩り下ろしショウガを、新しく焼いたトーストに塗られた。

仕方なしに食べ終わった後、時計が止まっている事に気が付かず遅刻しかけた。

急いで履いたお気に入りのスニーカーの紐が切れた。

登校途中で3度、信号無視の車に轢かれかけた。

校門前に到着したと同時に、課題をテーブルの上に置き忘れた事に気が付いた。

夕焼けの中、帰る途中にどこから飛んで来たサッカーボールが後頭部へ直撃した。

帰り道でコーヒーの替えを買おうと思っていたが、衝撃ですっぽ抜けてしまっていた。

帰宅後に向かったスーパーに、いつも飲んでいる製品が売っていないだったので適当に選んだ。

レジへ向かう途中で、落ちていたビニール袋を踏み、派手に転んだ。

帰宅後、同居人と予約録画した番組を見ようとしたが、録画がうまくいっていないかった。

そして、風呂上がりに飲もうとした牛乳が傷んでいた事に気が付い

た。

重なったアクシデントはともかく、これだけはダメだ。どうしても許せない。

風呂上がりの牛乳は1日を締めくくる重要なイベントだ。

どうしても牛乳が飲みたいが、かといって傷んだのを飲んで腹を下したくはない。

だが近所のスーパーが、この日付が変わろうとしている真夜中に開いている筈が無い。

そうだ。少し遠くて面倒だが、コンビニにでも買いに行こう。

と、そんなくだらない事を考え、諦めてくださいよーと制止する同居人を振り切ってコンビニへ向かった。

そこまではよかった。

さすがに今日は多過ぎたが、ちよつとした不運はしょっちゅうある事だから、別にそれはいい。

目的のブツを無事に購入し帰宅しようとした時、普段通らないような暗い裏道を前に、こう考えてしまった。

今日は随分と酷い目に遭ってきた。だから意識的に普段とは違う事をしようか。

それにいつもは遠回りしてまで避けていたが、ここを通った方が早い。

時間をかけるほどに不運が増しそうだから、ショートカットして早く帰るべきだろうか？

「……さて、ヘンなの出てくる前に走って通り抜けますかね」

結局、左手に牛乳が3本入ったビニル袋を持ち、裏道へ歩を進める事にした。

——結論から言えば。

これこそが俺の、言わば中学校生活における決定的な選択ミスであったのだ。

出会い（前書き）

一晩で8人もの方にお気に入り登録して頂きました。マジ感謝。

前回は寝ぼけていて書き忘れていましたが、いつでも感想お待ちしております。

出会い

帰り道、深夜の暗さと静けさでなんとなく不安になるとほぼ同時に、蠢く人影が目に入った。

正直なところ、基本的に他人が何をしようと知った事ではないので無視しようとした。

「（なーんでわざわざ道路一杯に広がるんスカねえ……）」

が、避けるほどの空間は無いので、とりあえず歩を進める。退いてくれなかったら、それはその時考えよう。

近付くにつれて影の色彩や輪郭がはっきりしてくる。

下卑た笑みを浮かべる不良^{バカども}3人が同じ中学校の女子を囲んでいるようだった。

ブロック塀に押し付けられている女子は、怒りと諦観が入り混じった表情を浮かべている。

彼女の制服にはところどころ砂埃で汚れた跡があるので、大方乱暴されたか、今されそうなのだろう。

彼女^{エサ}に群がる不良^{バカ}達は好き勝手な事を口にしてている。

「お嬢ちゃんも運が悪かったな。でも、こんな夜中に出歩いてる方も悪いよな？」

「キキキッ、違いねえよな！ スキルを封じられたタダの小娘がよ

お！

「？　おい、どこ見て……なに見てんだテメェ」

少女の視線がこちらへ向けられていたらしく、それを追った不良の1人が俺の存在に気が付いた。

「何でもないッスよ　（俺ん家そっちだから退けよ、このクソカスが……あれ？」

いつの間にか口から漏れ出していた罵倒の言葉。やっちゃったと思っただけの時既に遅し。

不良達のうちの一人がこちらへ顔を茹で上がらせながら走って来る。

「なんだと？　舐めやがってクソガキが！　殺し」

怒りが滲む言葉が最後まで語られる前に、向って来た不良がその勢いのまま倒れた。

一刻も早く帰って一息吐きたかったので、素早く黙らせる事にしたのだ。

勢いよく振るわれた拳を、それなりに力を込めた右アッパーをアゴに食らった不良は失神。

「！？　君、は」

「何い！？　お前も過負荷を！？」

それだけではない気がするが、地に伏した不良の姿に取り乱す不良達。

ぺたんと座りこんでいた少女も驚いたようで、聞き取れなかったが何か呟いていたようだった。

「落ち着け！ キキッ、どんな過負荷スキルだろうと俺の過負荷マイナスで封」

「俺はただ早く帰りたいだけなんスから、邪魔しないで下さいよー」

「「かっ!？」」

アイツの言う事も聞いておけば良かったかな、とぼやいていると、残った不良2人が突如倒れ込む。

眼前の光景に少女が目を丸くしている。いや、そりゃ目の前でいきなり人が倒れたら普通驚くか。

「…… 若干過剰防衛な感じもするけど、まあこれは正当防衛スよね。 うん 悪くない悪くない」

今、あまりに面倒で思わず使ってしまったある特技。どうしようもなくくだらない才能スキル。

そのステキパワーで残る2人も大した事が出来ず、あっという間に気絶させられてしまった。

「……あー馬鹿らしい。俺のマイナスでー、とかガキかったの」

それにしても無駄に時間を使ってしまった。これ以上面倒事が起きる前に早く帰らなくては。

1つ大きく溜息を吐き、気絶中のバカを踏みつけて帰ろうとした時、声を掛けられた。

「あ、待って！ 僕は恩人にお礼も言わせてもらえないのかい？」

振り返ると少女――短いスカートで膝を立てているから目のやり場に困る――がこちらを見上げていた。

無視しても良かったが、それは人としてどうなのかと思い、一応形だけでも心配を見せる。

「んあ？ あー、ダイジョブでした？」

「うん、君のおかげで無事だったよ。ありがとう。君がいなかったら今頃僕は……」

そうまで言って彼女の表情に少し影が差す。

大変な目に遭ったんだろうが、それは俺も似たようなものなんだ。早く家に帰らせてくれないか。

「大変でしたね。俺は帰りますから、アナタも気をつけて帰って下さいね」

「じゃ、じゃあ最後に恩人の名前を覚えてくれないかな？」

さっさと帰ろうと踵を返したが、再び呼び止められる。

仕方が無いので足を止め、改めて振り返り、彼女の顔を見る。

「僕は安心院^{あしむ}なじみって言うんだ。君は？」

安心院なじみ。そういえばそんな名前を聞いたような気がする。

噂ではいくつもの不思議なスキルを所有し、誰からも愛されている、という人物だったはずだ。

確か彼女は親しみを込めて安心院^{あしんいん}さんと呼ばれているのだと、耳にした事がある。

ふと、自分が持つ情報が全て伝聞のものでしかないと言う事に気が付いて、なんだか面白く感じた。

「アナタがあ^あの安心院^{あしんいん}さんスか？　へー……　つと、俺の名前でしたよね？」

危ない危ない。余計な事を言って、また時間を浪費する所だった。正直これ以上の面倒事は本当に勘弁してもらいたいのので、早く名乗って帰ってしまおう。

「俺の名前は蛇籠白蛇。^{ジャカゴ ハクダ}別に覚えて貰わなくても結構ッス」

「教えてくれて、助けてくれて本当にありがとう。忘れないうちにお礼をするよ」

「ははは、期待せずに待ってます。それじゃ、今度こそさよなら」

「おやすみ、蛇籠君」

忘れないうちにお礼……ね。

本当にするのだろうか。むしろ出来るのだろうか。

礼に期待していない、という言葉は半分冗談で半分本気だ。

彼女が同じクラスの俺の事を全く知らなかった時点でアテにならない。

——まあ、もつとも。

顔だけ知っていて名前を知らなかった自分も大概ではあるが。

夢の中（前書き）

6／10 編集…ちょっとネタが思いついて容姿変更したのでバツサリ削除しました。

夢の中

先の邂逅の後、丸一日心身共に蓄積された疲労を解消するために深い眠りに落ちた。

落ちたはずなのだが、直後にどういう訳か教室のような空間で横たわっている事に気が付いた。

「……ん？」

「目が覚めたかい蛇籠君？」

「ここは…… って安心院さん？ あれ、コレ夢？ いや現実？」

「僕の事は親しみを込めて安心院さんあんしんいんと呼びなさい。それよりも――」

「っうえ！？ 何やってんスカアンタ！？」

いつの間にか教卓に座っていた彼女が薄く笑みを浮かべ、自身の服に手を掛ける。
そして、止める間も無く糸纏わぬ姿になった彼女がこちらに目を向ける。

妖艶な視線に晒された体が、意思に反して尻餅をついてしまう。

これはマズい。何がって、アレな事をされる夢を見ているという事実がマズい。

夢は精神診断に利用される位に、本人の深層意識が発露しているものだと言われている。

つまり、こんな夢を見てしまっているという事は、即ち。

「（そんなに欲求不満だったのか俺は……　なんか悲しい）」

そんな思考に辿り着き、少し自分が嫌になる。

同居人がいるからと言うのもあるが、こんな夢を見るほどだとは思
いたくなかった。

自己嫌悪に陥っているのもお構いなしに、俺に跨りしな垂れかかる
ように抱きついてきた。

「（ぬおおお！　静まれ俺の煩惱おおお！）」

揺れる意志を奮い立たせ、何とか誘惑に打ち勝とうと試みる。

だがそうする事で、より服越しに伝わる彼女の体温と柔らかさを意
識してしまう。

せめて肌色を見ないようにと上を向いていると、彼女が耳元に顔を
近付けて拗ねたように囁く。

「……我慢しなくても良いんだぜ？　これは僕の感謝の気持ちなん
だから。遠慮するなよ」

「あー、そうッスねー……」

駄目だ。この一言で心が一気に屈する方へ傾いた。

自分はどう取り繕うとも女好きである事は変わらない。性^{サガ}と言う奴で、どうしようもない。

それに嫌がっているどころか、助けられたお礼と言って相手の女の子の側から誘ってきている。

据え膳食わぬはなんとやらと言うし、断ったら彼女に恥をかかせる事になるのではないだろうか。

だが、まあ待て。

ちよつと自重しろ自分。

夢の中とはいえ、相手はさっきまで名前を知らなかった人物。

こういう事をする前にもっとお互いの事を知りあって、それからでも良いのではなからうか。

むしろそれが普通なのではなからうか。

「気持ち嬉しいんすけど…… さよなら！」

「あ——！」

身を任せたいという誘惑を振り切り、彼女を優しく押し退け立ち上がる。

そしてまさに脱兎の如く出口の戸へ全力疾走。

「煩惱退散——ッ!!」

開ける手間さえ惜しい戸を叫びと共に前蹴りでぶち抜き、その勢いのまま外へ飛び出た。

「逃げられちゃったか……でも僕は君の事を諦める気は——」

後ろで残された彼女が何か言っているが聞こえない。とにかく逃げなきゃ、妄想（こころ）から。

「——よ、ハ——。あ——す——!」

「んん——……?」

「朝ですよハクダ! あーさーでーすーよー!!」

「うわ!? ……あー、アレやっぱ夢か」

吐きそうになる位の勢いで体を揺らされたおかげで意識が覚醒する。気が付けば自室のベッドの上で、同居人に起こされている所だった。

「ほら、早く顔洗って来て下さい」

「いつもいつも悪いッスねイズミン いやホントに」

「本心からそう思ってるなら深夜徘徊やめて下さいよー」

「いや、それとこれとは別でしょ」

あっけからんと言いつつ、彼女は小さな体と艶やかな髪を大きく動かしプリプリ怒る。

そう、彼女が同居人——くわみずいずみ神水泉。

先の会話で分かる通り、家事も気配りもできるよく出来た娘だ。

顔も可愛らしく、亜麻色の長髪とスレンダーな体形で、もうチートじゃね？ というレベルだ。

ただ自分と同じ年——むしろ誕生日的に年上なのだが、どう見たって小学生にしか見えない。

「何か失礼なこと考えてませんかー？」

「…… 顔洗ってきます」

不思議だ……と心の中で呟いた言葉が漏れてしまわぬうちに逃げる事にする。

ノソノソとベッドから這い出し、ノロノロと洗面台へ向かう。

鏡の前に立ち、冷水で顔を濡らす。

まだ3月で冷たいが、朝食が覚めてしまうのでお湯が出るまで待ってられない。

テキトーに洗顔を終え、居間へ向かう。
雑だがキッチンと顔の汚れは落ちている。

それに今までニキビが出来た事が無いので、今の所改める気はない。

無駄に8LDKもあると廊下が長い長い。

よくこんな物件があったよな、とボンヤリ考えながら歩く。

居間に着くと、味噌汁の匂いが漂ってくる。

思い出したように腹がくう、と空腹を訴えた。

それにしても。

「あんな夢見てる時点で普通も何もなかったよなあ……」

どうせ夢だったんだから……とちよつと後悔したのは仕方の無い事
だろう。

朝の風景（前書き）

感想来てて正直驚きました。やったー

朝の風景

テーブルの上には味噌汁、白米、ホウレン草のおひたし、焼鮭。どこからどう見ようと一般的な日本の朝食だ。シンプルながら空腹を増長させる献立に、腹が咆哮を上げている。

「うわー、随分と手間掛けましたね」

「えへへ。疲れているみたいでしたから」

「そっかそっか。じゃあ早速頂こうかな」

ホント、気配りのできるいい娘だ。

今の彼女からは、とても去年の彼女の姿は想像できないだろう。

……今はそんなことより、先に飯だ。

初めに醤油を掛け、おひたしを口にする。

シャキシヤキとした歯応えと独特の青臭さが広がる。

ちょっと醤油を掛け過ぎた気もするが、まあ許容範囲内だ。

次いで焼鮭の身をほぐす。

塩気が若干強いが、硬めに炊かれた白米が進むので問題ない。

そして、味噌汁を口に含んで一息吐く。

出汁をしっかり取ってあって、これまた美味しい。

半透明になった柔らかい大根もいい仕事をしている。

自然と頬が綻ぶ。

「うん んまい」

「そうですか？ なら良かったですー」

「あ、ちよつと柚子コショウ取って」

お手製の柚子コショウが泉の側にあるので、取るように頼むと少し嫌そうな顔をする。

重ねて催促すると、渋々こちらへピンを押してきた。

「さーてと 柚子コショウを味噌汁に入れてー」

「正直そういうのは使って欲しくないんですけどねー……」

「何で？ 味噌汁に七味とか掛けるのと変わらないじゃないスカ」

「辛さで出汁とか消えちゃいませんかー？」

「あー…… イズミン辛いのが駄目ッスもんね」

「そ、そういう訳じゃなくてですね！？」

そんな感じで和気藹々と朝食を平らげていく。

あっという間に洋食化に伴って日本人が忘れた和の心が無くなってしまった。

「はー、食った食った」

「片付けは私がやっておきますから、ハクダは着替えて来て下さい」

「なら先に歯磨いちゃいますよ」

今まで気が付かなかったが、彼女はジャージを着ている。

日課のマラソンを終えてから朝食を作ったという事なのだろうか。

歯を磨き、朝のニュースを眺めながらそんな事を考える。

『昨夜未明、高校生3人が〇〇付近の路地裏で倒れているのが発見されました。』

近所の住人の証言によると、どうやら何者かと言いつ争っていた模様で――』

いくら口喧嘩したからって、暴力振るう奴が近くに住んでいるのか。ここはなんて恐ろしい町なんだ。

「うわ、近所じゃないッスか。おっかねえー」

「ちょうどハクダが牛乳買いに行ったとき……?」

「なんスかその目は。俺がなんかしました?」

昨日は女の子を助けたただけだから、別に非難されるような事はしていない筈だが……

あ、ひよつとして。

彼女の顔から視線を少し下げながら考えを伝える。

「……泉の分の牛乳買って来なかったから？」

「違います！ 何が言いたいんですか!？」

どうやら勘違いだったようだ。

「ゴメンゴメン。そう怒らないでよイズミン」

「別にいいです。それより昨日誰か不良に絡まれている人の事、助けませんでしたか？」

「あー、うん。同じクラスの安心院さん。なんか絡まれてたッスから」

考え込むような仕草をする泉。

一体何がそこまで彼女を困らせているのだろうか。
しばらくして、彼女が口を開く。

「……どこですか？」

「今ニュースで言ってた路地裏で」

即答。別にやましい事はないので、普通に答える。
すると本当に少しだけ眉を顰めて見せる。

再び彼女は口を開く。

「……その絡んでいた人はどうしたんですか？」

「いきなり喧嘩吹っ掛けて来たから全員気絶させた」

「原因それですよ！ 当事者なのに何でそんな無関係を装えるんですか!？」

傷害事件の真犯人が衝撃の事実と共に判明。

確かに昨日の出来事とこのニュースでは類似点多過ぎる。

そういえば確かに不良^{バカ}を殴った気がする。

だがアレは正当防衛なので、キチンと説明する。

「いやね、聞いてよ泉さん。なんか過^{マイナス}負荷持ちだったんスよ」

そう口にした途端に血の気が引き、顔が真っ青になる。

「過^{マイナス}負荷……って!？ ハクダ、怪我はありませんでしたか!？」

「ああ無い無い。いつぞやの野球少女とは違って、全然なんともなかった」

「そうですか……」

無事である旨を伝えると、安堵の息を漏らす。
チラ、と時計に目を向けると、既に余裕が無くなっている事に気が付いた。

「……げえ！？ もう時間無い！」

「あっ！ 本当です！」

「やべえよやべえよ、俺課題やってないツスよ！」

疲れて寝てしまつて、まず鞆から出してすらいない。
軽く絶望を味わっている所に救いの手が差し伸べられる。

「学校に着いたら見せてあげますから、急ぎましょう！！」

「マジで！？ ありがとう女神クワテラス様！」

「本当で思ってるんなら次からやって下さい！ 何回目だと思ってるんですか！？」

「……」

「聞こえないふりしないで下さい！」

そうして、慌ただしい朝が過ぎて行くのであった。

運命の切欠（前書き）

大和君の容姿の説明が、他で使おうと思っていたものと間違えていた事に気が付き修正。

髭親父は番外編のオリ主の説明だよ……眠い時に更新しては駄目です
すね！

学園長↓理事長に更に修正。

運命の切欠

唐突だが、蛇籠白蛇は今年——まだ3月だというのにだ——最大の問題に直面していた。

課題が終わっていないどころか、ある種それ以上にヤバイ状況だ。思わず校門前で立ち尽くしていると、横から声が掛けられる。

「時間無いですよ？ どうしたんですかー？」

「…………… ジャー ジ 忘 れ た ……………」

「…………」

よほど呆れていたのだろう。
いつもならばすぐ入るフォローも今回ばかりは無かった。

「………… 取って来ます…………」

「…………遅刻しないようにして下さいねー」

「はい………… すいません、鞆お願いします…………」

短いやり取りを終えた直後、素早く踵を返し。
全力疾走で自宅へ向かったのだった。

走る走る走る。

校則^{ルール}など知った事か。

ここで止まっては――！

「ダラッシャアアア！ 滑り込みセーフウ！！」

「おい蛇籠。ホームルーム終わったら職員室に來い」

「アウトだったあー！ー！？」

前の入り口から飛び込んだが、疾走の甲斐無く人外魔境^{しよくいんしつ}への呼び出し。

肩を少し落としながらも教卓の目の前にある自分の席へ向かう。

「神水と山都^{やまと}もだ」

「分かりましたー」

「……はい」

隣の席に座っている泉が苦笑いしながら話しかけて來た。

「お疲れ様ですー。呼び出しがあるなんて、何があるのでしょうか？」

「え？ 俺が遅刻したからじゃないんスか？」

少し思案顔になった泉が白蛇の疑問に答える。

「そういう訳ではないと思いますよー？ ギリギリですが時間に間に合っていましたし」

「あ、そうなんスか？ てっきり間に合わなかったものだ」と

「そもそも遅刻していなかった私と大和やまとが呼ばれたので、違うと思いますー」

確かに。遅刻を咎めたいのなら、呼び出すのは自分1人で良いはずだ。

普通に登校した泉も呼ばれるなど、とばっちりも良い所だ。

「蛇籠に神水うるさいぞ」

点呼中だというのを忘れていた。

何故か話し掛けた泉よりも自分が先に注意され、その理不尽さに小さく溜息を吐く。

「神水―」

「はい」

それにしても、自分が職員室に呼び出されるとは、何かやってしまったのだろうか。

まさか昨夜の事か。しかし個人を特定するのが早すぎないか。当事者は自分以外――

と。

朝のドタバタでてっきり忘れていたある事に思い至り、視線を横に向ける。

最も入口に近い列の最前列に座っているソイツ。

自分と目が逢った、例の当事者――安心院なじみが薄い笑みをこちらへ浮かべていた。

「蛇籠―」

「はい」

名を呼ばれたので慌てて眼を逸らし、返事をする。
彼女は他の奴にも同じ反応をしているのか、それとも何か企んでいるのか。

「（……どこか面倒事になりませんように）」

心の中でそっと、淡く儚い願いをつい呟いてしまったのだった。

「」「箱庭学園への入学推薦？」」
「ああ、特待生として理事長がお前達を指名した。というか校長室に来てる」

泉ともう1人の男と自分の声がハモる。

その男の名は山都^{やまと}大和^{やまと}。

彼がどう思っているかは分からないが、自分にとっては親友だと思っている。

ハードボイルドだと思いきや、案外フランクなこの男。

いかんせんハードボイルドかつオッサン成分が同学年比30パー増し。
そんな性格から避けられていたが、ある事がきっかけで親しくなったのだ。

それはさて置いて。

箱庭学園と言えば総数1560人とかの超マンモス校だったはずだ。
普通科、芸術科、体育科、そして各学科の特別クラスの各学年合計13クラス。

その上特待生はエリートコースまっしぐらだった気がする。

「ありがたい申し出だが……一体何故だ？」

大和の疑問ももつともだ。

何故そんな凄い所から声を掛けられるのか？

何故わざわざ俺達を推薦したのか？

そもそも何故その箱庭学園が自分達を知っているのか？

いくら考えても疑問が解決する事はない。だが。

「どうするんだ？」

「…………… まあとりあえずお会いしますよ。 会って話して、

それからッスね」

「私もそうしますー」

「……俺もそれで構いません」

面と向かって腹を割って話せば、多少は真意も見えてくるだろう。

そう考えた自分達は職員室から退出し、校長室へ向かったのだった。

ふと、その途中。

「（昨夜の一件……安心院あじむは覚えてるのか？）」

思わず溜息を吐いてしまい、首を傾げられてしまう。

もしかしたらあの時の予想は裏切られているのかもしれない。

——無論、悪い意味で。

番外編（前書き）

話が進まないように進まないで、ちょっと気分転換がてら生徒会戦挙。
没ネタ・別のオリ主なのでネタバレは多分含まれません。

追記・残しておいて欲しいとの事だったので残しておきます。

番外編

「それでは庶務戦——『亥』の『猪突猛進』を行います！」

庶務戦の開始を告げる高らかな長者原の声に押され、男と善吉が同時にグラウンドを蹴る。

種目名『猪突猛進』。

ルールは実に単純で、中間地点を通った上で相手より先に屋上へゴールすればいい。

ただそれだけの、まさに猪のように単純なルール。

全力で走っているにもかかわらず、彼は少しずつ善吉に引き離されていく。

だがそれは当然の話。男がスポーツで善吉に適う筈がない。^{マイナス}
ある程度距離を引き離れた所で善吉がこちらを振り返ってくる。^{プラス}

「カッ、どうした？ 随分とお疲れみてーじゃねーか！」

「正直かなりキツイよ——でもね善吉君。そんな余裕が君にあるのかい？」

途端に善吉の顔が蒼白になり、さらに距離を引き離そうとする。

アブノーマル
異常とは比べるもなく寧猛で残忍な過負荷。マイナス

男はそれをほんの一瞬でも躊躇う事無く、善吉に向けて解き放とうとしているのだ。

必死の形相で走る善吉と、それを嗜虐的な笑みを浮かべ追い縋る男。

「ほいっと」

「がっ!？」

最後には善吉の努力も空しく背に衝撃を受け、大きく吹き飛ばされてしまう。

埃っぽい砂の上をゴロゴロと無様に転がる。

勢いが収まる頃には、側に男が待ち構えていた。

「無様だね、善吉君。動けるかい？ いや無理みたいだね」

「君はどうせ僕には何も出来ないのだろうと高をくくっていたのだろう？」

「確かに才能マイナスのが無い僕に出来る事は何も無いね」

「でも、安心して。」

「例え君が動けなくても。僕に才能が無くても。」

「それでも、地獄は見られると思うから。」

番外編 その2（前書き）

書けるようになりましたが話が一段落付きそうにないので番外編の続き。

本編のクオリティが下がらないようにこうして番外編を書いているのです。

と、このようにそれっぽい理由で番外編を書いてお茶を濁す訳です。

番外編 その2

何とか立ち上がろうとしている善吉を笑いながら男が眺めている。

「さてと、それじゃ早速始めようか」

「くそっ……！」

「おお怖い怖い。そう睨まないでくれよ、君の慢心が招いた事じゃないか」

言いながら善吉の背を踏む。

しばらく踏みにじっていたが途中で止め、気を抜いた瞬間に再開する。

「おい、何をしている！？ 相手の妨害はっ……！」

「ルールは『相手より早く屋上へ向かう』ただ一点のみ。妨害は禁止されておりません」

眼前の光景にめだかが声を荒げるが、長者原が何といった事もなく言い返す。

自身の無力さに齒噛みするが、善吉への暴力は止まらない。

「がっ、……っあ……！」

「安心してよ。『地獄を見せる』とは言っても、爪剥いだりなんか

はしないからね」

突然笑みを消し、踏みにじる力を強めていく。
地に臥せる善吉が必死に逃げだそうともがくが徒労に終わる。

「無理しない方がいいんじゃないかな。まだ過^{マイナス}負荷の影響残ってるでしょ？」

「……っ、くあ！」

そう。いくら不意を突かれたとはいえ、相手は弱者^{マイナス}。

本来の善吉の身体能力を考えれば、今のように無抵抗で嬲られている筈が無い。

「耳鳴りかい？ それとも吐き気かい？ 大穴で頭痛？」

「く、そ……！ 分かってて言ってるだろ……っ！」

「分かんないよ？ なんとなくなら自覚してるけど、自分に使った事なんて無いし？」

男が再び笑みを浮かべる。

残忍さも冷たさもない、無感情な笑顔を。

先ほどの彼の推測は全て当たっていた。

故に善吉は男の態度に怒りを覚え——同時に、何も出来なかった。

「いや驚いたよ。正直、たった一撃で君を戦闘不能にさせる程だとは思わなかった。」

「ただ『耳元で轟音が鳴り響いたと錯覚させる』だけの僕の過負荷^{スキル}は——」

「——僕の『耳獄耳^{デストロ}』は相当にマイナス成長をしちゃったみたいだね」

そう自身に言い聞かせるように呟くと、もがく善吉を蹴り飛ばし、背を向けた。

「君達もズルい手を使うからね。君が逃げられないように中間地点で待ってるよ」

「待て……よ」

善吉の声を無視し、男はゆっくりと校舎へ足を進めたのだった。

番外編 その2（後書き）

「蛇籠白蛇のースキル解説コーナあー わーパチパチー」

「さて、今回のオリ過負荷『耳獄耳』^{デストロ}」

「これは『耳元で轟音が鳴り響いたと錯覚させる』というスキル
ツス」

「……何て言えはいいのか、これ嫌がらせ以外に使い道ありますかね？」

「この話では善吉君に錯覚させた事で、平衡感覚などを奪い抵抗出来なくさせる為に使用しました」

「ちなみに、スキル名の由来はデストロイヤー。^{デストロイ}」

「破壊と耳が掛かつてる訳ツス」

「鼓膜を破壊するってんでデストロイヤー^{みみ}」

「そして轟音は耳にとっての地獄、だから地獄耳」

「さらに地をもじって耳にした訳ツス^{イヤ}」

「イヤーが耳に成ったのでデストロイヤーからイヤーが無くなつてデストロ」

「……長くなりましたが、由来はこんな感じツス」

「ちなみに、『獄』を顔と見なした時に、耳がその両側にあった
ります」

「番外編の為に即興で考えたんすが、作者的に結構いい出来
だと思ってます」

「次は誰が解説に来るんスかね？ それでは、さよならー！」

対面

職員室から退出する途中、白蛇が溜息を吐いたのでつい首を傾げてしまう。

そんな私の様子に苦笑いをした彼は私の頭をクシャリと撫でる。

異国の血が混じった私の髪。

日本人ではありえない、茶色を帯びた金髪。

コンプレックスだった私のこのカラダが、彼のおかげで今では――

「イチャイチャするのは後にしてくれ、御兩人」

「いっ……!?!」

「えっと、誰と誰スか？」

「……お前ら以外に誰がいるんだよ」

「はあ……?」

「絶対分かってませんよね……」

大和に横槍を入れられ、幸せな時間を邪魔される。

思わずジト目を向けてしまうが、白蛇を見ていて気付かない。

短めのくしゃ髪。静かな物腰。大人びた表情。すらっとした手足。

いかにも好少年といった感じで、十分魅力的な部類に入るだろう。

白蛇は大和の事をオッサンと言うが、理由が未だに分からない。言動だろうか。

寡黙だが会話が嫌いな訳ではないらしい。好きな事になると途端に饒舌になるから。

寡黙と言えば、どうやら白蛇は寡黙とハードボイルドを同一視しているようだ。

よく大和の事をハードボイルドだと言っているが、それはむしろ白蛇の方。

彼がボギヤ貧なのは仕方のない事だが、せめて誤用は止めて欲しいものだ。

そんな事を考えていると、視線に気が付いたらしい大和と眼が合う。

「どうした？」

「いいえ、なんでも」

お互いの間に散る火花を幻視した。

そう。私と大和はある意味でライバル同士だ。

大和の考えも分かるが、それでも私にだって譲れない物がある。

「やれやれ何してんスカ…… 行くッスよ？」

無言の意地の張り合いが呆れた声に止められる。

そう言えば箱庭学園の学園長を待たせていたんだっけ。

ズンズン先へ進む白蛇を、私達は慌てて追いかけたのだった。

校長室へ到着。泉達も後ろから追いついてくる。
中から談笑が聞こえる。

三人顔を見合わせ、あえて話を邪魔するように勢いよく戸を開けた。

「失礼します！」

御老人2人は突然の訪問者に大層驚いたようだった。
現に箱庭学園の理事長が驚愕の表情を浮かべ胸を押さえている。
だがすぐに持ち直し、笑みを浮かべた。

「おお、よく来てくれましたね。座って下さい」

第一印象としては『これぞ好々爺！』といった感じだ。

アホ毛がチャージングだと思えない事もないが、歳の的にどうなんだろうか。

そんな風に考えていると、校長が立ち上がる。

「では私は席を外しますね。失礼の無いようにな。特に蛇籠」
「あの時のような事が無ければ、ですがね」

嫌味ったらしい口調の校長を見る事なく言い放つ。

何が悲しくて嫌味を言われなければならないんだ、と白蛇は溜息を小さく吐く。

校長が完全に退室したと同時に理事長が口を開く。

「あの、一体何が？」

「気になさらないで下さい。色々あったんです」

「そうですか……」

有無を言わずに言い切った泉の表情は硬い。

その裏の感情をほんの僅かにでも読み取ったのだろう。

理事長は深く追求してくる事はなかった。

気まずい空気が流れる。

が、強引に大和が話を変える。

「……ところで、何故私達を推薦なさったのですか？」

「そうでした！ いやはや、歳は取りたくないものですねえ……」

しみじみと呟きながら懷をまさぐる。

何をするのかと黙っていると、サイコロを3つ、3人の前に置いた。

「自己紹介を先にしましょうか。箱庭学園理事長、不知火袴です」

「蛇籠白蛇ッス」

「……山都大和です」

「神水泉です」

「私はあるプロジェクトを主催して……どうぞ」

白蛇にサイコロを握らせる。

「これを一つ、同時に振って貰えませんか？」

「はあ、分かりました……」

賽を握りこみ、特に何も考えずに軽く投げる。

2、6、3。偶然も何もない、変哲の無い出目だ。

意図が分らず訝しげな眼を向けると、向こうも何か考え込んでいた。

「強いて言うならば最小公倍数、順番に規則は無い……彼女の、――」

「……理事長？」

「おお、これは申し訳ありません。蛇籠君、もう一度振って貰えますか？」

「ええ、構いませんが――」

5、2、3。やはり普通の出目だ。

「……申し訳ありませんが、しばらく続けて下さい」

「はあ……」

2、2、1。 3、2、6。 2、1、1。 6、5、1。
まるで法則性が見えない。正直自分自身で訳が分からなくなっている。

「規則性は不明、ですか……しかし一応記録しておきましょう」

「なんかスイマセン……これで何を知りたかったの？」

「ああ、その説明をしていませんでしたね」

コホン、と軽く咳払いをして話を続ける。

「便宜上『フラスコ計画』と呼んでいるプロジェクトの為に異常を集めているのです。アブノーマル

人の身では為し得ない事柄を為し遂げる、その偉業を理論立てて説明する為にね」いじょう

「……確かに、それなら被検体は多い方が正確なデータが取れるかな」サンプル

「異常なら、さっきのサイコロで異常な結果が表れるはずだった、と言う事ですか」アブノーマル

「そういう事です！ この老人のしたかった事が分かって頂けたよう
うで何よりです」

「待てよ。」

と。

「そこまで手間掛けておいて、それだけで終わる訳ないじゃないッスか」

そこで白蛇が理事長――不知火袴の熱に水を差すように、閉ざしていた口を開いた。

「 ささ、全部話してもらいますよ 話持ちかけて来たのはソツチ
なんスから 」

その顔には、何の感情も浮かばない笑みが張り付いていた。

「頭沸いてんじゃないスカ」 (前書き)

何故か自分でも分かりませんが難産でした。
うーん、なんでだろうか。

実はタイトルと本文の書き方がこの話からこっそり変わっていたり。

「頭沸いてんじゃないスカ」

校長室で、緊張の糸が張り詰める。

「本当の事、とは？」

「惚けないで下さいよ。 たった3人の為にわざわざ出向く訳ないでしょう。」

入試なんかで数かき集めた後で、試験なり面接なりで質を見れば良い訳ツスから」

袴は自身の失策を恨み、言葉を失う。

白蛇が言っている事はもつともだ。だからこそ。

先に賽を振らせ、その後に計画——表面だけだが——を伝えた。言及を避ける事を意図した順番だったが、裏目に出てしまった。完全に疑いの目で見られている。

もう、リカバリは効かない。

——実は、この老獪がこの窮地を脱する事自体は非常に簡単だった。

ただ『知らない』と一言言われたなら、彼はとりあえず退くつもりだったのだから。

だが、白蛇の異様な雰囲気吞まれた彼に、そこまで考えが至る

はずもなく。

また、その脅迫にも似た静かな圧力は、彼にそこまで考えさせる事を許さなかった。

「疑う事をせずに言う事を鵜呑みにして、それはそれは痛い目に遭いましたから。

協力させたいんだったら少しだけで良いッス。俺を信じさせて下さい」

アレは他人にしてみれば取るに足らない些細な事でしょうがね、と吐き捨てる。

袴はその言葉の重さに思わず唾を飲み込む。

彼が凄惨な過去を送っていたらしいからではない。

その事実を教訓として、駆け引きに活かす事が出来てしまっているからだ。

過去の教訓が必要な場面で活かす事は難しい。

袴ほどの老人であってもそうなのだから、中学生には尚更の事だろう。

果たして目の前の15にもならないこの少年は、一体何を見てきたのだろうか。

そう袴が思案顔をしていると、突然大和がバツの悪そうに口を開く。

「……だからあの時は悪かったよ」

「ホントっスよね。で、どうします理事長？」

別にどうしても訊きたいって訳ではないので、言わなくても構いませんよ。

ただその程度で、なんとかなるだろう、なーんて楽観視しないで欲しいッス」

大和の言葉を淡々と切り捨て、先程より幾分か和らいだ様子で袴の返答を促す。

しばらく袴は黙っていたが、やがて観念したかのように話し始める。

「……君が言う通りですね。お話しましょう、フラスコ計画の概要を――」

100年前、フラスコ計画の為に作られた箱庭学園。

その前身である黒箱塾の時代から既に始動していた試験管計画。フラスコ

一世紀以上変わらない、人間を完成させるという最終目的。

不知火を代表とする数十の財団から国家軍部にまで至る出資者。戦時中にもバブル最盛期にも絶える事無く続けられた研究。

その研究が最終段階に近付き、歴史と人類の变革も共に近付いている事。

「安価に天才^{アフノーマル}を大量生産する——それこそが教育者^{わたし}の悲願です」

鳴った喉の音は誰のものだったか。

「人為的に天才を、ねえ……」

全て訊き終えた白蛇はふう、と短く息を吐き、

「頭沸いてんじゃないスカ」

齒に衣を着せる事無く、思い切り暴言を吐いた。
先程の緊張などお構いなしのその様は、ある種の迫力さえ見
られる。

「っ……何故そう思うのですか？」

「何故って、そもそも天才の定義は何スカ？」

長い説明苦手ッスから1度だけスよ、と話し始める。

「天才はあくまで『ギフト相対的に』高い能力を持つ者を指しますよね？」

だから100億が天才アブノーマルになったとしたら、それが普通ノーマルになる。
もしその中から更なる異常アブノーマルが現れた場合、それをまた追い求める事になる。

まあつまり……その堂々巡りが終わる事は、決してないツスよね？」

だからと言ってその理想を否定する気はサラサラ無いツスけど。
そう最後に付け足して、締めくくった。

「……では、計画に協力する気は無いと。そういう事ですか？」

「いいえー、そういう訳じゃないスよ？ 天才の蔓延る世界を見てみたいツスし」

「と言うと？」

袴の疑問に白蛇はニヤリと、先程の無感情なものとは異なる笑みを浮かべる。

「俺が言ってるのは『とんでもない事思い付きやがったな』って事ツスよ。

さて。フラスコ計画には協力します——が、2つ条件を付けさせて頂きたい」

その内容を聞いた袴は、しばらく返事をする事が出来なかった。

「それは置いといて、大和達も賽振って下さいよ。なに俺だけにやらせてんスカ」

「あ、スマン」

「と言うか勝手に話進めないで下さいよ！ ……私も協力するつもりでしたけど」

『おい外野うるさいぞ』

「失礼しましたー」

「……………」

「……そう気を落とすなよ」

重苦しい空気を背負い校長室から退出する白蛇。

察しは付くだろうが、その原因は2人が振った賽が原因である。

『では泉さん、変に気張らずに振って下さい』

『はいー……えいっ』

出た目は1、1、1。

当たり前のようにピンが揃う。

念の為にと何度か繰り返してみるが、その結果は全てピンゾロ。
他の目は出ないのか？ と大和が言えば。

『……今度は2のゾロ目か』

『こりゃアレでしょ、順繰りにゾロ目が出るみたいな』

『そうなんですかねー？ あっ、3のゾロ目』
『早速これだもの…… つかマジっすか』

『……次は俺の番か』

『ではどうぞ』

『（なあ泉、心なしか理事長の対応がおざなりじゃないッスか？）』

『（確かにそんな気がしますねー）』

『おい外野うるさいぞ』

出目は2、3、4。

『連続した数字ですか。それでは続けて下さい』

『（やっぱなんか適当ッスよねえ）』

『（何ででしょうかねー？）』

『だからうるせえっての』

1、2、3。 4、5、6。 6、1、2。

何度試行回数を増やしてみても、やはり出目の数字は連続している。

『これはアレっすか。俺だけ仲間ハズレみたいな』

『とは言っても……なあ？』

『そうですねー。別段何か意識した訳でもないですし……』

「はあ……」

——そして冒頭に戻る。

「もう帰って寝たいッスよ……」

「まだ授業前だぞ」

「体感的に2週間くらい顔合わせてた気分なんスよ」

野郎2人でのろのろと歩いていると、少し急いでいた泉が振り返る。

その顔にはどこか焦燥が浮かんでいた。

「1時間目体育なんですけど、そんなにのんびりしてて大丈夫なんですかー？」

沈黙。

泉が何を言っているのか、理解出来ない。

いや、脳が理解を拒んでいる。

「……………」
「……………」

沈黙。

ようやく脳が現実を受け入れ始める。
しかしそれでもなおその言葉の意味を理解するまでには至らない。

「……………」
「……………」

沈黙。

脳が彼女の言葉を咀嚼し、ようやく意味を理解する。

——同時に冷や汗が一筋。

ちなみにこの間5秒である。

「大丈夫じゃねえよお！」
「余裕は——あと2分んん!? 急げえ！」
「全力疾走しても間に合うか怪しいじゃないッスか!? うわあ
ああ！」

階段を飛び降りるように下りていく。
その2人を見ていた泉は小さく笑い、その後を静かに追った。

「つ、疲れた……」

「次古文ツスよ…… 課題やってねえのに……」

体育で完全に燃え尽きた2人。

傍で泉が苦笑いをしながら扇子で風を2人に送っている。

炎天下の中で持久走デスマーチを行った男子とは異なり、女子は教室で自習だったのだ。

白蛇は朝に自宅への往復してすぐの事だったので、半ば屍と化している。

「あはは……はい。今さっき写しておきましたよー」

「うう、マジでありがとう……」

「はい、お水ですー」

泉が鞆から取り出した、結露したペットボトル2本を2人に渡す。
それを受け取った2人は突然元気になる。

「ひっ……！ キンキンに冷えてやがるっ………！」

「あ……ありがてえっ………！」

「ううっ……涙が出るっ……！ 犯罪的だっ……！ うますぎるっ………！」

「体育のほてりと野郎共の熱気で暑苦しい体に、1時間ぶりの冷水………」

染み込んできやがる……！ 体にっ……！ 溶けそうだっ………！」

一通り楽しんだ後、平時の、むしろそれより低いテンションに戻る2人。

「っはー、うめえ………」

「やー、なんでただの水がこんなに美味しく感じるんスカね？」

「あ、授業もうすぐ始まりますよ」

「うへえ」

ハードな運動を行ったためだろうか。

まだ1時間しか経っていないと言うのに、白蛇は空腹を感じ始めていた。

「（そーいや朝飯を食ってから一月近く経っているような気がする）」

そんな訳あるはずないか、と自身の妄想に笑ってしまふ。
大和がどうしたんだ、と訊かれ、返事に困った白蛇は笑ったまま
首を振るのだった。

彼との出会いは、ある種運命的なものであった。

偶然、生徒会での書記の仕事で帰るのが遅くなったから。

偶然、あの時にスキルを使わなかったから。

偶然、あの道を通ったから。

偶然、ガラの悪い不良共^{カス}に絡まれたから。

偶然、僕が持つ他のスキルを封じられてしまって、抵抗が出来な
かったから。

何より、偶然彼がそこを通り掛かってくれたから。

昨夜彼に窮地から救われた事で僕、安心院なじみは今日も平穏な
一日を迎える事が出来た。

今までスキルが封じられる事を考えていなかった僕があのとき感

じた恐怖。

そこから救ってくれた彼には、本当に感謝してもし足りない。

だから、今までは名前も知らなかった彼とこれから付き合っていこう。

有象無象の1人ではなく、『蛇籠白蛇』と。

『おい外野うるさいぞ』（後書き）

解説的な、そんなアレ

・サイコロの出目

実はスキルとちよつと関連していたり。詳しくは先の話で。

・体感的に2週間くらい顔合わせてた気分

顔合わせ（運命の切欠）書いてから2週間経ってしまいました。
ゴメンね3人とも。

・元気になった2人の子芝居

『カイジ』の地下チンチロ編より。

更に詳しく言うと、初給料日に班長からビールを貰った時。

原作・映画版・アニメ版のどれも、本当にうまそうに飲んでます。
個人的にはアニメ版が一番迫真の演技だと思ってます。

・キンキンに冷えてやがるっ……！

ビール一本の為に強盗だってやりかねない……っ！

・朝飯を食ってから一月近く経っているような気がする

朝食（朝の風景）書いてから一月も経ってしまいました。

マジでゴメンね3人とも。

このまま空でも飛べればいいのに。(前書き)

やっと書き終わった……！　こんなのに2か月もかけてたのか。

恐らくこれが今年最後の更新です。早くてもセンター後、遅ければ4月までかかるでしょう。

……………魔が差さなければ、ですが。

このまま空でも飛べばいいのに。

「あーいそれじゃー、気ーつけて帰れー」

「あゝあ、ようやく学校終わったか……」

「本当にキツかったツスね……… そうだ、カラオケにでも行きます？」

「……いいな。暑いし、涼むついでに行くか」

「遊ぶのも良いですけど、今日こそはちゃんと予習して下さいよー？」

「へーい ……で、泉は行きます？」

「もちろん！ 今日部活お休みですし！」

ホームルームを終え、3人が集まる。

夕方になりマシになったとは言え、未だ暑いのでカラオケで涼もうと言う話だ。

その小さな集団に安心院が近付こうとした時、側にいた女子が話しかけてくる。

「どうしたの、安心院さん？」

「蛇籠君にちょっとした恩があるからね。お礼を言いたいんだ」

「お礼？ 蛇籠にですって？」

そう言う女子は顔を顰^{しか}め、不快感を隠そうともしない。

彼女の態度に若干の苛立ちを覚えるが、同時に理由も知りたいと

いう欲求が沸き上がってくる。

表面を微笑で繕い、内容を話すように促す。

「随分と嫌っているみたいだけど、何かあったのかい？」

「何かも何も、去年アイツと同じクラスのほぼ全員が入院したのよ！」

「なっ……!？」

「怪我は全く無かったらしいけど、それなのにまだ誰も、担任の教師も退院していないのよ!」

絶句。

内容があまりに予想外過ぎて頭に頭が追い付かない。

いや、話の理解は出来る。出来るが、それでも頭の中が纏まらな
い。

クラスのほぼ全員が病院送り。それも生徒だけではなく、教師も。
蛇籠白蛇が1人でやったのか？ どうやって？ 一体何故？

「それって、何か理由があったのかい？」

「あんな頭おかしい人の考えなんて、知りたくもないわ!」

「そう……」

さり気なく周りを窺^{うかが}って見ると、彼女に冷たい眼差しを送る者が
多数と彼女に同調している者が少数。

ほとんどは言い掛かりだと理解しているが、それでも一部は相当
深く嫌っているようだ。

詳しい話を本人に直接訊こうとすると、再び女子に止められる。

「何しに行くの」

「ちよつと気になる事があるからね。直接訊こうと思って」

「今の話聞いてたでしょ!？」 絶対アイツらの仕業よ!？」

「聞いてたよ。忠告ありがとう。でもどうしても訊きたいんだ」

何をやったか分からないのに『絶対』か、と心中でぼやきつつ三人に近付く。

とはいえ同時に納得も出来てしまった。

安心院は昨日まで蛇籠白蛇の存在[・]だけを知らなかったのだ。だから自分で一日中彼の事を、言い方は悪いが観察していた。

分かった事は、彼は誰にでも味方に成り得る存在だという事。

街灯に引き寄せられる蛾のように、自ら面倒事へ近付いて行く。

そして本人が意識しないうちに手を貸し、勝手に解決していく。

中には彼を嫌悪する女子のように、彼に良い感情を持っていない者もいた。が、彼はそれを気にする事なく笑顔で手を貸した。礼に期待する事もなく。

皆を助け、対価を求めず、救った自覚も無しに、感謝される前に立ち去る。

まさにヒーロー——このご時世^おに於いてはとても『有り得ない』存在だ。

そしてもう1つ、先の事と矛盾するような事だと安心院本人も思うが――彼は、誰に対しても無条件で味方する存在ではない、と言う事。

語弊が無いように言うならば、彼は自分からならば平等に接する。

だが、もし彼に対して悪意を持って接した場合は別だ。

どういう訳か彼は悪意を持つ相手からの頼み事は全て断るのだ。

あたかも相手の心を見透かしたかのように。

最後に、彼は自身の――アブノーマル マイナス異常か過負荷かどちらなのか分からないが――自身の才能スキルを他人に見せないように、そして使わないようにしている、と言う事。

それも病的なまでに。まるで他者へ晒す事を恐れているような――
|。

若干話が逸れてしまったが、彼の性格を鑑みるに、その時のその行為にも、きつと『何か』があったのだろう。恐らく、ひた隠しにしていたスキルを使わざるを得ないほどの何かが。

「君達、ちょっといいかな」

「おおー？ 安心院さんじゃないスカ。 どうしました？」

フランクに声を掛けてはみるが、もしこの3人が自分に何の関心も示さなかったらと思うと内心冷や汗ものだ。

だが実際はそれなりに好意的に受け入れられているようで、ホッと息を吐く。

と、彼女がそんな事を思えたのもつかの間で。

「……スマン、ちょっと待っててくれ」

「え、ちょ何スか？」

安心院の姿を認めた大和が突然一言断り、白蛇の事を離れた所へ連れて行く。

そして彼女達に聞こえないであろう距離をとり、白蛇に問いかける。

「……お前、どうしたんだよ」

「？ 何がッスか？」

「何がって……」

平然と返す白蛇の態度に大和は少しだけ眉を顰める。

だが、その僅かに感じた感情をぶつけ晴らすような事は決してしない。

彼がこうなのは、それこそ昔からのだから。

「お前、さっきあのクソ女が言ってた事は聞こえてただろ？」

それを聞いた白蛇は少し、本当に少しの間だけ考え込む仕草を見

せる。

数秒の間の後の流れは、大和が想像していたものとはほぼ同一であった。

「ああ、アレっスか。 あんなの信じる方が少ないでしょ」

「……お前がいいなら、それでいいけどな。で、安心院と何かあったのか？」

「さあ？ どっかでバカ殴った時近くに居たんじゃないスかね」

「そしていつも通りに助けてやった訳だ」

「絡まれたのオレっスよ？ ま、どれもこれも、ある意味いつも通りッス」

「……そうか」

——なんて分かりやすい。

他の事も同じ位分かり易ければな、と大和は1人で苦笑する。

そんな態度を訝しげに思ったのだろうか、白蛇は彼の事を見つめる。

「それだけッスか？」

「……ああ。悪かった」

「なんで謝ってるんスか？ っと、待たせるのも悪いッスから、早く行きませんか？」

「……そうだな」

苦笑いをしながらも大和を急かす白蛇。

——本当に、昔から変わらない。

大和は心の中で呟きながら、早歩きで安心院達の元へ戻るのだ
た。

「やー、遅くなりました」

「いいよ、僕が首突っ込んでる訳だからさ」

「安心院さんが話しかけてくるなんて珍しいですね。どうしたんで
すかー？」

軽い口調で問われている事に、安心院は逆に緊張してしまう。

この楽しいな空気を壊してしまわないか。拒絶はされないだろう
か。

そう思うだけで握った手の内に汗が滲^{にじ}んでくる。

少し、本当に少しだけ躊躇^{ちゅうちよ}し、彼女は意を決したように口を開く。

「君達に訊きたい事があるんだけどー」

「それは去年の、クラスが丸々入院したー、って話ツスか？」

息が、止まる。

なんと言う事はないと言わんばかりの軽さで笑い掛けて来る。

彼は何故、疑われているというのに、どうして笑う事が出来るの
か。これではまるで、安心院の方に後ろめたい何かがあるかのよう
だ。

「う、うん。一体何があったのか教えて欲しいなって」

「んー、まあいいか。とりあえず帰りながら話しません？」

「あ、そうだ」

突然口を開く泉。

もつとも、それは彼女本人にしても予想外の事であつたらしく、向けられた視線に気が付くと慌てて口元を押さえた。

「な、何でもないですー……」

「……思わず口にしちゃったのか？ おっと、そろそろ行かないか」

「……………はあ」

「……その、なんだ。元気出せ」

近道をする為に路地裏を歩いていく4人。肩を落として先頭をとぼとぼと歩く白蛇の周りには、どんよりと湿った暗いオーラが漂っている。

それと言うのも、なんやかんやで安心院も加えた4人でカラオケ

屋に向った所、

『学割ですね？ では学生証をご提示下さい』

『 あっ、学生証忘れた。 スイマセン、制服なんスけどダメッスか？ 』

『申し訳ありませんが、制服では認められませんね』

『 えー！？ こないだは制服OKだったんスけど、やっぱ駄目ッスかね？ 』

『規定が変更されてしまいましたから……学校指定の教科書はお持ちではありませんか？』

『……あれ、白蛇は教科書類、「泉に見せてもらうから必要無いッスもーん」とか言って、全部机の中に置きっぱなしでしたよね？』

『 ああ…… 』

『持って、無いんだな？』

『 そう言う説も……まあ確かにあるな…… 』

こんなやり取りがあったのだ。そのため白蛇のテンション株価は、現在進行形でストップ安の大暴落中だ。

——しかし、不幸というものは幾度も続くもので。彼に降りかかる面倒事は、それだけでは済まなかった。

「よお白蛇……ちょっとこっちに来い、面貸せよ」

「 やれやれ、ツイてない。 何でよりもよって今日なんスか？

……はあ 先行ってて下さい 」

突如現れる、ガラの悪い男達。ニタニタと気味の悪い笑みを浮かべ、白蛇を取り囲む。

白蛇は少し難しい顔をしたが、やがて諦めたように溜息を吐くと

突然の出来事に呆然としている3人をそのままに、彼らの要求通りに重い足を進めた。

——そして、数分後。

「向こうが心配だなあ 全く！ なんだって今日に限ってこんな目に遭うんだか」

「ぐ、が……！」

「大丈夫ッスか？ まあ 俺がやったんスけど」

「な……にを……しやがった……！？」

「教えない。皆大好き週刊少年ジャンプじゃあるまいし、いちいち説明なんてしないって」

そこには無傷の白蛇と、地に伏す不良たちの姿があった。

不良を数人集め積み重ね出来た即席の椅子に腰掛け、白蛇はだるそうに肘を付きながら溜息を吐く。

向こうの状況が気になる。だが、全く動く気が起きない。このま

ま空でも飛べればいいのに。

そんな事を考えながら、何をする訳でもなく地面に転がったオブジェを眺めていると、そのうちの1つが不敵な笑みを白蛇に向けていた事に気が付く。

「ぐっ……へへへ、あいつらの事が心配か？ 蛇籠お……！ 今頃あの3人は――」

「は？ …………… ああー、そう受け取ったんスか？ 違う違う」

答える白蛇の口元に浮かぶ笑みは、嘲りではなく同情。その表情を見るに、どうやら本心からそれを思っているようだった。

「俺が心配してるのは、向こうで3人に喧嘩を売っているであろう、君の友達の方ッスよ？ 大和も泉もやり過ぎるきらいがありますから。心配だなあ」

驚愕で固まる不良たちを無視し――恐らくは気が付かないまま、彼らに背を向けて語り続ける。

「異常性アブノーマルでしたっけ？ 大和も泉も、今考えればサイコロテストでの結果はああ成しかって然るべきッスね うんうん 振り返ってみれば、確かに彼らは異常アブノーマルだった ……俺なんかとは違って」

それは白蛇の静かな迫力に圧されたからなのだろうか。まるで、最後の一言だけが――。

「……それはともかく！ 向こうの様子が色々心配なんで、行きますね。それじゃ また今度」

一度だけ振り返った彼の表情は、いつも通りの笑い顔。少しだけ軽やかに見える足取りで、路地裏から颯爽と去っていった。

「アイツ、何なんだよ……！？」

後姿が消えてから、ポツリと呟かれたそれは一体誰の言葉だったのか。しかしそれは、確かに路地裏に残された彼らの思いを的確に表した一言だった。

地に伏す彼らは土埃で汚れてこそいるが、何かをやられたはずの体には傷一つ無かったから。

そしてもう1つ。

あの時の、最後の一言だけが――まるで、『蛇籠白蛇』ではない誰かの言葉のようだったから。

結局彼らが立ち上がったのは、白蛇がどこかへ行ってしまった後の事だった。

このまま空でも飛べればいいのに。(後書き)

Q. 生けるチートこと安心院さん、ビビリ過ぎじゃない？

A. 恩人に素気無くされるんじゃないかと思ったたら、そりゃビビるでしょう。

というか、彼女は白蛇を特別視し始めている、というのがあります。

Q. 白蛇が不良に使ったと思われるスキルってどんなん？

A. 秘密です。ヒントを挙げるとすると

実際は『怪我をさせなかった』のではなく『結果的に怪我が消えた』のです。

「流石の俺でもこれにはドン引きッスよ」(前書き)

はい、魔が差しました。

「流石の俺でもこれにはドン引きッスよ」

重い足音が薄暗い路地裏に響く。そして、静かな溜息も。

今、自分は今日一番の自己嫌悪に陥っている。だがそれでも、友人の元に向かわねばならない。

「向こうはどんな状況なんだろうなあ…… ああ嫌だ、心配だけ
で行きたくない……」

出来る事ならば行きたくない。だが、そう言う訳にもいかない。
確かに彼らは異常な才能を持ち、それを日常でも発揮している。
その平凡な凡夫などは比べ物にならない異常性を利用し、その恩
恵を受けている。当然自分の手助けなど、全く必要が無い。それは
確かで間違えるべくもない、ある意味では残酷な程に圧倒的な現実
だ。

だからと言って、それを完全に制御出来ている訳ではないのも事
実だ。

それ故に自制の効く（というより暴走してしまうだけの異常性が
無いだけなのだが）、やり過ぎた彼らのフォローは決まって自分が
する——否、させられている。

「（あつち俺をどう思っているんだか。 便利な友人、程度の認識なんスカねえ……）」

それでも親友として思っている自分は、やはりお人好しなのだろうか——そう自嘲とともに再び溜息を吐く。

そう言えば、ここしばらく溜息を吐く回数がやたら増えている気がする。もし本当に溜息と共に幸運が逃げていくのだとしたら、きっと自分の幸運値はゼロに限りなく近く、もしかしたらマイナスに足がはみ出ているかもしれない。そう自分自身で思ってしまうほどのだから、数えた訳ではないのだが、相当な回数をしているのだろう。

——自分にも彼らのような才能があれば。せめて、彼らの隣に並べられるだけの何かがあれば。

程度の差はともかく、幾度そう考えたのか分からない。何時だろうと何処だろうと、事ある度に襲いかかって来るその感情に苛まれる事数知れず。

とはいえ、最近はその劣等感にも折り合いを付けられるようになってきた。単に麻痺してきただけかもしれないのだが。

「……はあ」

諦めよう。もうどうやっても、この劣等感からは逃れられない。今までずっとそうであったし、今だってこの通りだ。これから先も——少なくとも何か劇的な出来事が起こるまでは——このままなのだろう、きっと。

だったらその都度その都度で自分に言い聞かせるしかない。諦め

ろ、彼らは自分とは違うのだ、と。

そう自分に言い聞かせながら、再び重たい足を友人の元へ進めるのだった。

「うわ…… や、そんな気はしてたんすけど…… ええ……」
「た、助け……ひぎや……あぁっ……！」
「さすがにこれは無いわー。 何この地獄絵図？ 流石の俺でもこれにはドン引きッスよ」

そこには大和達と――

――その足元に体を螺子ネジのごとくネジネジと振ねじられた不良が転がっていた。

確かに字面では大層笑える絵面だろう。もし同じシーンがギャグ漫画であったなら、デフォルメされたキャラが雑巾のように振じれているに違いない。

だが、現実には全員が全身血に塗れ、皮膚が引き裂け、肉が潰れ、骨が砕け、骨片が露出し肉から突き出てはみ出している。

そして、蛇籠白蛇が思い切り引いた理由なのだが――その全員が、意識を保っていた。

彼の眩きももつともな、まさに地獄絵図と言った様相で、とてもではないがこの光景を直視して笑う者

がいたとすれば、その正気を疑わざるを得ないほどの凄惨さだ。

白蛇は癖になってしまった溜息と共に、普段通りの歩調で――先程の態度などおくびにも出さずに――地面に転がっている愉快なオブジェへと歩みを進め、大和の横を通り抜けようとする。

「……スマン、やり過ぎた」

すれ違いざまに耳へ届いた眩き。

その声に釣られて足を止め、目を向ける。申し訳なさそうにしている大和。俯うつむいている泉。そして床に転がった消しゴムを見るかのような、目の前の惨状に何ら感想を持っていないような――それでいて、どこか呆氣に取られているかのような安心院。

固く絞られた雑巾のような有様の不良たちへ近付きながら、本当にそう思ってるなら初めからそうしろ、と再び嘆息。

側に寄った所で背を向け、しゃがみ込み何かを始める。

「どのみち治すのは俺ツスから、程度なんかはどうでもいいんスけど。」

それより、『奇想転害』テリブルトラブル使いました？」

「……ああ」

「ふーん……ま、『幸裏餓死』エンハンスレートをじゃないだけまだマシ、と思いますかねえ……」

背を向けている為3人は気が付かなかったが、この時『治療』を

進める白蛇は、安堵の溜息をこっそりと静かに吐いていた。

「（ 泉が幸裏餓死エンハンスレートを使っていないってのは、初めから分かっ
たんすけどね。 もし使っていたら、今頃残りの2人が……という
か、ここら一体がどうなっていたのやら。 大和は奇想転害テリブルトラブルがある
分無事だったろうとは思うけど。 アレ使ってる時の奴は本当、
ゴキブリ並みのしぶとさッスからねえ…… まあ、それでもダメな
時は駄目なんだろうけど ）」

神水泉の幸裏餓死エンハンスレート。

山都大和の奇想転害テリブルトラブル。

奇想転害テリブルトラブルを使うのはまだ良い。 慣れていないとはいえ、対象は基
本的に個人で、あっても今回のように怪我をさせるに留まり、余計
な他人を巻き込まないからだ。

だが幸裏餓死エンハンスレートは別だ。 アレは巻き込まない方が難しい。 こんな路
地裏でなんて使ってしまうえば、何が起るか分からない——否、何
が起ころうともおかしくない。

それこそ眼前に隕石が落下するか、突如周囲の建物が瓦解し頭上
に降り注ぐ事になるか、といったレベルの何かが。

だから、泉がスキルを使わないでくれている、本当に良かった。
白蛇はむしろ、そう心の底から感謝さえしていた。

「（ 安心院はどうなんだろうか？ 確か1京のスキルがあると
かなんとか言われてるくらいッスから、なんとなかった……ってア

レ、使っても結局無事なままでいられるスキルでもあったんじゃない？
」……………はあ
」

思わぬ方向からの予期せぬ精神攻撃。自爆とも言ふ。

そう、良く考えなくとも、安心院なじみは『向こう側』の人間（本人は人外を名乗っているようだが）なのだ。1京などという文字通り桁が違うスキルを備える彼女は、やはり不平等を感じるほどの異常だ。話したばかりの相手に早速抱く劣等感に、白蛇は思わず溜息。もう幸運値はマイナス以下に違いない。

「……………よし。これで傷は完全に消えたんで、そろそろ帰りましようかね」

随分と時間が掛かってしまう事のような言い方をあえてしたが、実際の所そうではない。

傷を消すなど、白蛇にとっては一瞬で終わられるくらいに容易い事だが、今回は自己の内面と向き合う為に——とでも言えば格好が付きそうなものであるが、内容は他者と自分を比較し、卑屈になっていたただけだ——わざわざ時間が掛かってしまうフリをしていたのだ。

無傷の不良達の傍から立ち上がり、路地裏を抜ける道へと歩みを進める。

置いて行かれる形となった3人は急いで白蛇の後をついていく。

どこことなく重く気まずい空気の中、4人は会話を交わす事も無く共

に歩き、やがて別れる。

そして、いつしか時は流れ往き。

——この長い長い^{プロローグ}中学時代が終わり、
ようやく物語が幕を開ける——
|。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7482t/>

箱庭に、はぐれ者

2011年11月23日10時48分発行